

## ★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。



# まきのまろる (瀬里果)

## プロフィール

1952年岡山県生まれ。高校卒業後、いくつかの職歴を経て21歳で上京。ときととしんいち氏や北山しげき氏のアシスタントを始める。田丸ようすけ氏の草野球チームに参加したのがきっかけで、同氏のアシスタントも務める。78年、「月刊少年サンデー」にて、まきのまさる名義で商業誌デビュー。翌年「ほっとけどく」を「週刊少年サンデー」で連載する。また、「少年チャンピオン」でペンネームを瀬里果にしてニャンですかア?」を連載。次第に青年誌に活動の場を移し、「漫画アクション」「プレイコミック」などで描き続け、現在にいたる。趣味はバイクと釣り。



温泉街で育った漫画少年時代  
好き勝手に描くのが好きだった

漫画が好きになったのは、小学生のときです。岡山県と鳥取県との県境に奥津温泉という温泉街があるんだけど、僕はその生まれなんです。田舎なので周りに本屋はなかったけど、貸本屋が一軒だけあってね。「街」とか「影」といった劇画誌が好きでした。その店の漫画はほとんど読んだかな。

お袋が美容院をやっていたんですよ。温泉街だから芸者さんやヌードスタジオの踊り子さんが、髪をセットしにやつてくるんです。盆とか正月になるとおこづかいをくれましたね。芸者さんたちも貸本屋でいろいろ借りたりしていたから、それを読ませてもらったりしました。親は僕が漫画ばかり読んでいるのを見ても何も言わなかった。というか、お袋はいつも忙しい人だったし、親父は郵便局で電話の交換手をしていたから、週に2回か3回、泊まり込みなんです。だから怒る人がいなかったというか。

気がついたらストーリー漫画みたいなものを描いていました。罫線もなにも入っていない真っ白な雑誌にコマを割ってね。ちやうど『伊賀の影丸』が流行っていた頃で、忍者漫画が描きたかったんですよ。友達に見せたりしたんだけど、なんだかよくわかんない、って言われて(笑)。ストーリーの5大原則、つてあ

るじゃないですか。起承転結とか5W1Hとかね。そこがはつきりしていなくて、自分の好きなのところから描いていたから、そりゃわからないよね(笑)。

ギャグ漫画というよりは、ストーリー漫画志向だったかな。雑誌に似顔絵を投稿することもあまりなかった。そういえば、『オバケのQ太郎』のアニメをやっていたとき、「オバQを描いてハワイに行こう」というキャンペーンがあつたじゃないですか。クラスの友達が送ったら、何かの賞をもらったんです。じゃあ俺も送ろうと。クラスのみんなからも「絵がうまいんだから、絶対当たるよ」と言われたんだけど、当たらなかった。あれはうまい下手は関係ないんだよね。当たった友達のオバQは下手なんだけど、勢いがあつて、ハガキいっぱい描いていたんです。僕のはすごく似ているんだけど、こじんまりとしちゃつてね。今思うとそこが当たらなかった理由なのかな。それ以来、あまり絵を

描いて送ることは、しなくなっちゃいました(笑)。

高校を卒業したら家を出たいと思っていたので、名古屋にある新日鉄の下請けの会社に入りました。そこはすぐ辞めて岡山に戻り、地元のデザイン会社に行きました。漫画家になるには、どうしたらいいかわからなかったので、その会社でカットを描いていたんです。ちょうどその頃、姉が東京の美容院に勤めていたので、会社を辞めて上京しちゃいました。もう漫画家になりたい一心でね。



### 同人誌の仲間の集まりから 漫画家と知り合いアシスタントに

姉のアパートは、葛飾の堀切にありました。僕、高校時代から手塚さんの「COM」を読んでいて、なかでも永島慎二さんが好きだったんですよ。彼の漫画でビルの窓ふきが出てくるんですが、その仕事に憧れ

ていて(笑)。「アルバイトニュース」で募集していたから、さつそく電話して窓ふきを始めました。1年ぐらいそのバイトをやったかな。高田馬場の15階ぐらいのマシオンとか、あと水道橋の芳文社に行ったこともありました。窓から漫画原稿がいっぱい見えましたよ。

実は名古屋にいた頃、漫画の同人グループに入っていたんですよ。「新コミックプロダクション」という名前です。会長が名古屋の人だったんですが、東京にもメンバーが何人かいて、毎月一回集まっては、飲み会をしていました。その頃、勝川克志さんと知り合ったんです。勝川さんは僕らがやっていた同人誌のレベルをはるか



75年渋谷にて行われた、新コミックプロダクション東京集会



に超えた本を作っていました。「跋折羅(バサラ)」という同人誌で、ちゃんと印刷して綴じて、表紙はシルクスクリーンという。パルコにある書店に卸して、ちゃんと一般に流通していましたから。すごい人がいるな、と思つて、勝川さんに手紙を書いたら返事が来たので遊びに行きました。それからずっとつき合いが続いています。そのときに、ときさとしんいちさんや、北山しげきさんを紹介してもらつて、アシスタントをするようになってきました。

ときさとしんのところは半年、北山さんは2年ぐらいアシスタントをやりました。おもに背景を描いていました。ビルやクルマを描くのは好きでしたね。北山さんが野球をやっていた



商業誌デビューはツツパリギャグ漫画  
さまざまな編集者との出会いを経験

いろんなところに持ち込みをしましたね。「少年キング」や「少年チャンピオン」。あと「少年ジャンプ」や

関係で田丸ようすけさんの草野球チームに入っていたので、誘われたんです。野球はそんなに好きではなかったんだけど、運動不足だったし参加したんです。それ以来、田丸さんのアシスタントもするようになってね。実は、いまだに背景を手伝っていたりします。本当に長いつきあいというか。

オリジナルですか？ 最初はなかなか時間が取れなかつただけど、アシスタントに慣れてきたら、オリジナルを描く時間が確保できるようになりました。それでいろいろ描き始めたんです。

「少年サンデー」の新人賞に応募して、いちおう最終選考まで残ったんです。それであるとき、「サンデー」の編集さんから電話があつたんです。三宅さんという模図かずおさんの担当をしている人で、「これで賞は取れないから、ほかに描いてあるものがあつたら持つてきて」と。それで持つていったら、「ツツパリの兄ちゃん、描ける?」って言われて。ほら当時、矢沢永吉が人気だったじゃないですか。矢沢に憧れる少年向けに描いてみてと。

そしたらたまたま「月刊少年サンデー」で、田村信さんの原稿が落ちそうになつたんですよ。田村さんのが18ページで、僕が書いたのが16ページ。あと2ページ書き足したら載せるよ、と言われて、「描きます描きます!」って(笑)。それがデビュー作の『はみだし永吉』。ギャグ漫画です。それを編集長が見て、じゃあ週刊でやろうということになりました。タイトルの『は

みだし永吉』だとパツとしないから、『ほつとけとつぐ』というタイトルに変えてね。

初めての週刊連載だから、大変でした。知り合いの漫画家に背景を頼んで、土日でネームを描いて、月曜に編集からの直しが入る。火曜に直してOKをもらつて、ペンをいれるのが水、木、金の3日。そしてまたすぐネームという。それまではのんびりとネームを描



いていたんだけど、週刊のペースは驚異的だからね。なかなかいいアイデアが出ないんですよ。出てもつまらないものばかりで(笑)。こんなのでいいのかな、と思いつながら描いていました。結局12回で終わりました。そのあと探偵モノを描きましたけど、それも12回でした。

しばらく「サンデー」では出番がなさそうだったので、「キング」に行きました。そこで神保志郎さんの原作で、テニス漫画を連載しました。でも担当編集が『御用牙』の人で、けっこう自信家の、何でも自分で決めるタイプで、ころころ内容が変わっていったんです(笑)。いちおう僕もキャラクターの設定を決めて描いているので、このキャラクターにこんなセリフ言わせるのはどうかと思うわけです。神保さんも「俺の原作、どうなるんだろう?」と言ってましたから(笑)。その編集さんは、どこからヒットにつながるかわからな

いから頑張ろう、と言っていたんだけどね。最初はストーリー漫画だったけど、だんだんギャグ風になっていきましたから。ちよつとノイローゼになってしまうような仕事で。結局1年ほどで終わりました。

そのあとは「チャンピオン」で『ニヤンですかア?』というお色気ギャグ漫画を連載しました。担当は、以前「キング」にいた顔見知りの編集さんでした。小林

『ニヤンですかア?』  
週刊少年チャンピオン 連載



『突撃ポリス』  
月刊少年チャンピオン 連載

さんという方で、「キング」時代、とてもよくしてくれ  
たんですけど、そのときはものにならなかった。それ  
で彼が「チャンピオン」に移って、今度は連載できるよ  
うになったわけです。『ニヤンですか?』は単行本が  
3巻ぐらい出たのかな。でもこれは小林さんの上司  
の副編集長が叩き台を作ったもので、いつもワンパ  
ターンなんですよ(笑)。編集の企画で漫画を描くと、  
ちよつと乗れないところがありましたね。なんとかな  
らないかな、と悶々としていました。まあでも、編集さ  
んの言うことはちゃんと聞いていましたけど(笑)。



少年誌から青年誌にシフト  
自由に漫画を描きたい気持ちは変わらない

歳を取ると、だんだんギャグが描けなくなります  
ね(笑)。ほら、ギャグつてすごく。パワーが必要だから。  
それでも「チャンピオン」や「キング」でギャグを描いて

いたんですけど、ちようど「漫画アクション」から連絡  
があつて、うちに来ないかと言われたりして、だんだ  
ん青年誌に移行していきました。「週刊漫画Times」  
とか「プレイコミック」、あと「まんがタイム」などでお  
色気路線の漫画を描くようになりました。

代表作ですか? うーん。これっていうのはないで  
すね。いちばん気に入っているのは、「つり王」という漫  
画誌で描いた『ヤマメ日記』という釣り漫画は、好き  
に描かせてもらいました。もともと釣りは大好きだ  
しね。50回ぐらい続いたかな。楽しかったですよ。自分  
で釣り場に行つて、カメラで写真を撮つたりしていま  
したから。雑誌は残念ながら休刊になっちゃったけ  
ど。今はサイトで全ページ読めるんじゃないかな。最  
近は『まんが羽生善治物語』といった評伝ものとか、  
コンピュータ関係の入門書を漫画にしたりしていま  
す。

結婚は25歳の頃、一度しました。バツイチです。子供はいません。まあこの際だから言っちゃうけど、40歳ぐらいのときバイクで事故って、4か月ぐらい入院したんですよ。そのとき病院にいた看護師さんと、この近くのマンションに10年ぐらい一緒に暮らしていました。まあいろいろありました(笑)。

「新つれづれ草」に参加したのは、おだ辰夫さんに誘われたからです。もともとおださんとは、漫画家同志のつながりだったんですけど、一緒に釣りやバイクでツーリングに行くような仲だったもので。そのおださんが昔やっていた「つれづれ草」を復活させると聞いて、ふたつ返事で参加することにしました。やつぱり、漫画を描くのは好きですから。あと自由なところがいいかな。楽しいです。



87年 友人と2人で北海道一周ツーリング

◆本格フライ・フィッシング浪漫—!!◆

# ヤマメ日記

第44話 ヤマメの「お見合い」!?



代表作『ヤマメ日記』『釣り王』連載

## ●インタビューを終えて

漫画家生活35年。ずっとプロとして活躍してこられた方ならではの、リアルな話をお聞きすることができました。2時間近くの取材でしたが、最後の最後にプライベートの話が出てきて驚愕！ そのお話だけであと2時間ほど取材したくなったのですが、残

念ながら「新つれづれ草」の趣旨に合わないので、断念（苦笑）。次にお会いしたときは、ぜひその話を聞かせてください。

文／中島泰司

2010年3月6日

埼玉県ふじみ野のご自宅にて

まきのさん自画像

